

「子どもの発熱」

～感染症について～

はじめに

子どもがどのくらいよくかぜをひくかについての研究では、9歳以下でいたい年6～8回とされており、保育所や幼稚園などの集団生活をするとその頻度はさらに増え、年間10回以上かぜをひく子もいます。2023年まではコロナ禍のために人の接触機会が減ったせいかもしれませんが、徐々に感染症が流行しませんでした。しかし、徐々に生活制限は緩和され、子どもの活動範囲も拡大しており、2024年はインフルエンザ、RSウイルス、手足口病など様々な感染症が流行しています。

Q1 抗菌薬って必要ないのでは？

子どもの感染症のほとんどは、

特別な治療は必要ないウイルス感染症です。予防接種が普及し、重症な細菌感染症は急激に減りました。以前は発熱時に細菌感染症を心配し、抗菌薬が使用されることありましたが、ウイルス感染症には抗菌薬は無効で、むしろ抗菌薬による体への副作用のほつが心配です。しかし時には、溶連菌咽頭炎など抗菌薬によりすみやかに改善する細菌感染症もあるため、抗菌薬が必要かどうか、厳密に判断する必要があります。

Q2 ウイルスに対する薬はありますか？

熱が出て咳や鼻水が出る、いわゆるかぜはウイルス感染症です。多くの場合、時間が経てば自然に回復します。抗菌薬は使用せず、症状を和らげる治療



(適切な体温管理や鼻水の吸引)を行います。例外としてインフルエンザやヘルペスはそれぞれ抗ウイルス薬があるため、投与により罹患期間が短くなる可能性があります。

Q3 まだまだ新型コロナウイルスは心配ですか？

子どもの患者が重症化する割合は成人と比べると少ないようです。しかし、2歳未満の子どもや基礎疾患を有する子どもは比較的状況が重くなる傾向があり注意が必要です。また、成人と比べて急性脳症や急性心筋炎などを併発して重症化することもあります。

Q4 どのような場合に受診を考えれば良いですか？

発熱の有無に関わらず、顔色が悪い、ぐったりしている、呼吸が速く苦しそう、意識がはっきりしないといった場合は至急受診が必要と考えられます。尚、3ヶ月未満の子どもに関しては、細菌感染症の割合が高く、急速



Q5 予防接種の最近の話題は？

に病状が悪化する可能性があるため、38度以上の発熱があれば速やかに受診してください。

子どもの予防接種のタイミングは、感染症にかかりやすい年齢などをもとに推奨が決められています。特に、生後2ヶ月から予防接種を受け始めることはお母さんからもらった免疫が減っていくなか、重症化しやすい感染症(百日咳や細菌性髄膜炎など)から子どもを守るためにとても重要です。2024年は4種混合ワクチンとHibワクチンが一体化した5種混合ワクチンが定期接種ワクチンとして接種開始になるなど、ワクチンスケジュールは定期的に変更があるため、かかりつけ医と相談しながら接種スケジュールを設定しましょう。

岐阜市民病院 小児科

今月の先生 平手 友章



- 専門分野
小児科一般、血液・腫瘍、感染症
- 役職
小児科医長
感染対策部感染対策室医長
小児血液疾患センター医長
- 主な資格
日本小児科学会専門医
日本血液学会専門医
日本小児感染症認定医

- NCPR (新生児蘇生法専門コース) 修了
- PALS プロバイダー
- インフェクションコントロールドクター (ICD)
- CLIC (小児医療診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会) 修了
- 卒業年、主な職歴
平成26年岐阜大学卒